
新津発新潟行

ふぁんふぁ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新津発新潟行

【Nコード】

N9513L

【作者名】

ふあんふあ

【あらすじ】

戸川^{といち}十一は新潟市内の病院へ向かう列車の中である事件に巻き込まれる。元やくざの彼がとった行動が、その事件の結末を思わぬ方向へ向ける。

ブローグ

7時52分発、新潟方面内野行き列車

朝の新津駅では、新潟行きの列車を待つ人の列がちらほら見えた。この4番と5番のホームは、10分から20分おきにでる新潟行きの列車で人に溢れる。特に階段の近くはものぐさな学生達に埋め尽くされ、その間を肩身の狭いサラリーマンたちがすり抜ける。

そんな新津駅の朝も、その事件までは何時もどおり平常だった。

「面倒だな……。近くに糖尿を見てくれる医者居りゃ良いんだが」

ぶつくさと文句を言いながら、一両目の真ん中ドア付近で四つ折にした小さな新聞記事を眺めるのは、戸川といち十一だった。

彼は持病の糖尿病の治療の為、いま新津駅から新潟行きの電車に乗り込み、人の波にもまれている最中だ。

『この列車は、長岡発、新潟方面亀田經由新潟行きで御座います。列車は6両編成です。おトイレは最後の車に御座います』

車掌のアナウンスは初々しかった。

おそらく、新卒が簡単な研修を終えて、実務に入ったところだろう。

「おっと……！」

近くに女子高生が滑り込んできたので、十一は体を四人掛け席の隙間に押し込んだ。

「ったく」

小さく毒付くと、折りたたんでいた新聞を鞆に仕舞いこみ、両腕を組んだ。

走り出した列車の中で、人々は思い思いの暇つぶしに勤しんでい

た。

あるものは携帯電話でお喋り、あるものは花札屋のゲーム機で遊びに夢中だ。

一昔前の若い戸川なら、そんな輩の胸倉を掴んで投げ飛ばす位はしただろうが、今の彼はただの病人であつて、その筋の人間でもない。ただの無職。それが彼の肩書きだった。

灼熱の蒸気

不遇者として、暗澹たる気持ちになった戸川は、そのネガティブな思索の矛先を次の駅に向けた。

いつの間にか出来ていた「さつき野駅」は、新津駅から目と鼻の先。おかげで新津を発車した普通列車は、愚鈍な動きでこの無人駅に停車することになる。

『次は、さつき野、さつき野です』

降り口の案内が無いことに気付いたが、新米なら忘れても仕方が無いし、そもそもこの駅で降りる人間を見たことが無い。

『列車、大変込み合っております。中ほどまでお詰め下さい』

このアナウンスがあるのは大概、次の「荻川駅」である。しかし、今日日、かなり込み合っているのだろう。

「ちよつと、ごめんよ」

隣に居たサラリーマン風の男の方へ少し詰めると、その男がまた少し詰めた。その隙間にリュックサックを背負った小学生くらいの男の子が入り込んできた。

「お、坊主。大丈夫か？」

「うん」

大の男の膝小僧辺りに、その坊主の頭が来る。戸川は蹴り飛ばしたりしないように、膝をまっすぐに伸ばした。

さつき野駅を発車した列車は、鮎詰のまま、田園地帯を走る複線の上をすべる。

「なんだか、何時もよりのつそりだな」

普段なら、さつき野から荻川、そして亀田の間は、かなりの速度を出すのだが、今日は違っていたのだ。周りの勤め人たちも腕時計や携帯電話を見やる。

もともと、このキハ52がそんなに速く走るわけではない。しかし、いくらなんでも遅すぎる。

乗客が騒ぎ出すころ、列車を大きな衝撃が襲った。

車が衝突したような。そんな大きな音が乗客の鼓膜を劈く。

「熱い！ 熱い！」

前方から、また違った音が度々響く。ひしやげた先頭部分から、ものすごい量の蒸気が車両に襲い掛かってきた。

「坊主！ 息を止める」

膝の下で不安そうにしていた坊主の抱き上げるとそう言った。

戸川は抱き上げた坊主からリュックサックを引っぺがし、自分も鞆を捨ててドア付近に何とか体を滑り込ませた。足元にはドアを手動で開くコックがある。これ进行操作すれば外に出られるはずだ。

「どういうこつた！」

赤く縁取られた小さな扉を開けて、コックを押したり引いたりしても、一向にドアは開け放たれる気配が無い。ロックが外れるだけなのか、と、ドアを手で開けようとしても効果が無い。

その間にも先頭車両は高温の蒸気で熱地獄と化していた。

「このままじゃ気道火傷で皆死んじまう……」

戸川は四人掛け席の窓を目指して、また人を掻き分け始めた。

灼熱からの脱出

掻き分け、掻き分け。やっと辿り着いた窓には、同じことを考えていた人間が我先にと折り重なり、微動だに出来ないでいた。

戸川は小僧だけならと、荷物を預けるネットに乗せた。

「這いつくばつてでも、あっちの車両へ逃げ込め。そうすりゃちつたー涼しくなるぜ」

「おじさんは!？」

「なに、心配しよんな。オラぁ考えがある」

そういうと戸川は小僧のリュックも荷物網に放り込むと、人々が四人掛け席に殺到する中、蒸気がもうもうと出てくる運転席方向に駆け出した。

戸川が辿り着いた先。それは、ぐしゃぐしゃにひしゃげた運転席だった。

足元には熱湯が溢れ、戸川の足首までを濡らした。

戸川は辺りを見回し、大きな“マンホール”を見つけた。そのマンホールは、パラボナアンテナのように緩いベースカーブを描いている。

「やっぱりか……」

むせ返る蒸気の中で、戸川は答えを見つけた。

「こいつをタネにせびる為にも、生きて帰らんきゃな」

戸川はひしゃげた運転席の料金箱を蹴り飛ばすと、普段、車掌や運転手の出入りするドアから線路に飛び降りた。一気に暑さから開放されると、大きく息を吐いた。

「さて、次は小僧だ」

そういつて送り出した小僧が居るであろう、そのドアまで砂利の上を走るが、ふと思いついたように最後尾車両まで一気に駆け抜けた。

「おい！」

最後尾車両。そこに車掌が居た。

「先頭車両で一体なにが！」

明らかに焦った表情の車掌が、乗組員室でおろおろしていた。

「やっぱりな、手前エのせいか。ドアが開かなかったのは」

「え！」

車掌が手に持っている鍵は、車両全体の扉を管理する鍵だった。

それを車掌が手に持っているということは、事故発生から直ぐに車掌が鍵穴から引き抜いたことになる。

「そんなこたア後だ。今はその鍵をその鍵穴にぶち込んで、さつさとドアを開けるこった」

車掌から鍵をひったくると、一気に乗組員室に昇りつめ、鍵を差し込むと捻る。

「おい！ さつさとそのボタンを押せ。両方だぞ！」

そういつて車掌がボタンを押し込むと、全ての車両のドアが開いて、人がボトボトと線路に降った。

呆けている車掌を見送ると、小僧を探そうと先頭車両まで駆け出した。

おそらくは先頭か、二両目の進行方向側だ。

「小僧！」

戸川は叫んだ。そして耳を澄ます。

「おじさん、おじさん！」

そういつてリュックサックを抱えながら、先頭車両の一番後ろのドアの辺りの荷物ネットに居た。

「よし、良くやったぞ坊主」

そういつて抱きかかえると、殆ど人の居なくなった車両から小僧を降ろした。

遠くから消防のサイレンの音が聞こえる。戸川は小僧を小脇に抱えると、線路ぎわの民家の敷地へと飛び移った。

「小僧。ココで待ってたところで病院には連れて行ってもらえねエ。」

新津まで戻ってタクシー拾うぞ
「うん」

戸川は新津駅まで歩き出した。

鉄道警察（前書き）

新潟（下越）方言があります。＊「ちんこてー」＜小さい＞

鉄道警察

「んで、俺に聞きたいことってなんだいや。てつどーおまわりさん」

「鉄道警察です」

戸川は坊主を近くの二次救急病院まで送り届けると、自分の火傷に簡単な軟膏を塗る処置を受け、さっさと新津駅まで舞い戻ってきた。

結局、電車は全てが運休。バスも満員で、仕方がなくヘンテコなオブジェの前のベンチに腰掛けてタバコを噴かしていたところ、鉄道警察の捜査員と名乗る女に呼び止められ、駅前の狭苦しい交番で事情聴取を受けていた。

「周りのお客さんは、アナタが大立ち回りしているところを見てたらしくて、それで少し」と、話を切り出した女捜査員に、渋々と受け答える。

「ああ、ちんこてー坊主が居たモンでな？　んで、ちゃんと病院まで連れてってやったよ」

「それで、事故の際にアナタ、運転席に向かったそうですね？」

「ああ、そうだよ。　　っと、その前に警察手帳と名前、教えてくれや」

小さな組だったが、若頭まで勤めた戸川は、警察の扱いを心得ている。もちろん、ハコビの際に色々と面倒を起こしてくれる鉄道警察が如何なる物かも、しかと。

「へー。斉藤文江ってんだ」

「それより、運転席でなにを見たか教えてくれませんか？」

この女“刑事”おかしなと言いやがる。と小さく毒付く。

早川は自分が犯人扱いされていると思って、一途に口を噤んだ。

「悪いけど、黙秘だ。犯人扱いするんなら、コッチも考えがあるぜ」
そいつって早川は懷から携帯電話と手帳を取り出し、知り合いに

弁護士を紹介してもらおうとダイヤルをプッシュする。

「ちょ、ちょっと待ってください。犯人扱いなんてしませんから、少しだけお願いします」

なにやら焦った表情の女刑事を見て、なにやらキナ臭さを感じ取った早川は、カマをかけることにした。それも、ごく簡単な。

「するつてーと、JRさんは証拠隠滅でもしちまったんけ？」

すると、一気に表情を曇らせた女刑事に、悪いことしちまったかな、と坊主頭をガシガシと搔く。

「ええ、JRは鉄道事故になると、何時もこうなんです……」
なるほど、と承服すると、戸川は話を諭す。

「俺が運転席まで行ったのは、逃げ道を探す為だ。坊主は荷物ネットに置いて。外に出ようと思ったんだ。かなり熱かったがな」
「それで？」

「俺は運転席がぐしゃぐしゃになっちまって、運転手もずたずただったし、仕方なく戸閉操作をしに、最後尾の車掌のところまで行ったんだ」

「待ってください！もしかして、非常コックが動作しなかったんじゃない」

「そうだよ？ 押しても引いてもビクともしねエ。それで、車掌が戸閉の鍵を引っかいたんじゃないやねエかって思ってたな？ それで最後尾まで走ったんだよ」

「……車掌は、乗務員室に？」

「居たぜ。おどおどしながらな」

「そうでしたか。それでは、運転席付近でアナタが感じたことを教えてください」

「運賃箱あるだろ？ アッコがひしゃげて、その上に貴婦人のボイラーハッチが乗ってた」

「貴婦人？」

「C57のことだよ」

「ああ、磐越物語号のことですね」

「そうだ。蒸気はモウモウだったし、かなり湯も入ってきてたからな」

早川は事細かに事実を話す。

その間も、女刑事の表情が暗くなりつつあることを感じていた。

事故が事件に。そして解明

「なんでー。さつきから暗い顔してよー」

戸川はわざとらしく言う。

女刑事は少し迷った表情で、「実は……」と切り出した。瞳はかすかに潤んでいる。

「はー、なるほどね。あの車掌って、お前さんの弟なわけね。んじゃ、業務上過失致傷で逮捕も止む無しになっちまうな」

「ええ、そうなんです……」

「でも新米なんだろ？ まー韓国の地下鉄火災と同じこになっちまったるもや。執行猶予くらい付くだろうぜ」

「でも！ でも、直哉がそんなミスをするなんて、私、信じられなくて……」

「うーん」

戸川は唸って考えた。

聞けば、弟の直哉は新津の育ちで、小さな頃から車掌を目指してた。そして去年夢がかなって、今日が初業務だったらしい。

「直哉は昔から、『車掌の仕事は一に戸閉、二に戸閉だって……』涙をこぼしながら語る女刑事に、戸川は少し考え込んでこういった。

「ま、少し思い当たるふちがあるがな」

そういった戸川の顔を女刑事が見つめた。

「おかしいだろ。韓国の鉄道事故があったのが4年前で、それと同じようにしちまうってのは」

続けて戸川は「その直哉の同期で、車掌になれなかったやつ、居るだろ？」というと、女刑事の顔色が変わった。

「そつえば、直哉に度々つかかって来たって……」

「そいじゃー話が早えー。こりゃそいつの仕業だ」

「どういうことですか？」

「まー聞け」

そういつて戸川はショートピースに火をつけて一服すると、足を組んだ。

「まず、その同期が直哉のマニュアルをすり替えたんだ。そして、何かしらの不手際があったときに、直哉に日勤教育を受けさせようとしてたんだな」

「でも、それとC57の衝突と繋がりが無いじゃないの」

「いや、これもその同僚の仕業だろう。要するに、“玉突き”なんだよ。列車の運転手って」

「玉突き？」

「一番のエリートが運転手で、次が車掌ってな具合にな」

「一拳に二人を追い出せば……」

「そうさな。多分、犯人は二人だぜ」

「まず、駅勤務に一人。そして、C57に一人……！」

「おそらくC57の一人はボイラー係だろう。列車の運転士には、色々規格があつてな？ 一定の地区しか運転できない免許もあるんだよ。多分、そいつが」

戸川がそこまで言うつと、女刑事は交番を飛び出していった。

「コレにて、一件落着。かな」

そういつて交番の巡査が飲み干したコーヒーの缶に短くなったピースを放り込むと、満足そうに交番を去った。

「なかなか、いい女だった」

最後に見せた強い輝きを放つ黒い瞳を思い出しながら呟く。

4番線の端つこで、上司らしき男に大声と身振り手振りで事情を説明する姿を見た戸川は、微笑むとタクシー乗り場で車に乗り込み、短く「程島」と告げた。

「それにしても、面アわれなくて良かったぜ」

「お客さん、何か？」

「いや、なんでも」

その頃交番の巡査は、さっきまでここにいた坊主頭の顔をどこかで見た覚えがあるという風に、パトロールから戻った巡査部長に話した。

すると、巡査部長は目の色を変えて「バカタレ！ そいつア戸頭組若頭筆頭の戸川十一だ！ なんて気付かなかった！」と唾はきながら怒鳴りつけると、胸元の無線機と本庁を繋いだ。

無線がつながる暫くの間に、壁に貼られた戸川の顔をこぶしで殴りつけた。

指名手配犯、戸川十一。

日本で最初に懸賞金をかけられた大悪党。

そして、日本のラスプーチンとも呼ばれた天才窃盗犯でもある。

事故が事件に。そして解明（後書き）

完結しました。初めての小説なのでへたくそで強引ですがあしからず。
オールフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513/>

新津発新潟行

2010年10月14日14時54分発行